

履中天皇 百舌鳥耳原南陵飛地い号外構柵整備その他工事に伴う立会調査

はじめに

履中天皇百舌鳥耳原南陵飛地い号（以下、「本飛地」という）は、大阪府堺市堺区南陵町4丁に所在する。本飛地は、履中天皇百舌鳥耳原南陵（以下、「本陵」という）の南西200m程に位置している。

標記の立会調査は、平成27、28年度に実施した外構柵整備その他工事で、本飛地の西（A-A'間）、北（B-B'間）、東（C-C'間）側掘削の際に、施工地における遺構・遺物の有無を確認することを目的として、陵墓課職員が平成28年3月14日から17日までと、同年5月8日から13日までおこなった。なお、上記以外の工事期間中は、古市陵墓監区事務所職員が随時立ち会った。

調査当初は、平成27年度に作業を終える予定であったが、本飛地西側の既存外構柵撤去後、墳丘盛土の一部が自然崩落した。また、本飛地西側の地山が堅固で、年度内における新規外構柵用杭の打ち込みが困難となった。そのため、本飛地の墳丘を可能な限り適切に保護できるよう工法を変更し、翌年度に再度工事と立会調査をおこなうこととなったものである。

1 立会地点の状況

(1) 土層の概要

立会調査地点における土層は、表土（Ⅰ）、近代盛土（Ⅱ）、攪乱（Ⅲ）、墳丘盛土（Ⅳ）、遺物包含層（Ⅴ）、地山（Ⅵ）が確認された。

Ⅰ層 表土。現地表面の土である。色調は黒褐色で、細粒砂からなる。

Ⅱ層 近代盛土。近代の瓦などを含む盛土である。色調は黄褐色で、細粒砂からなる。

Ⅲ層 攪乱。人為によるものか自然によるものか、成因については不明であるが、攪乱である。色調は黄褐色で、細粒砂からなる。

Ⅳ層 墳丘盛土。本飛地を築造する際に盛られた土である。墳丘盛土は上部と下部で様相が異なり、下部には旧表土を下側にして土塊を積む、いわゆる「天地返し」の技法が使われている。盛土の詳細については、後述の各調査地点で述べる。

Ⅴ層 遺物包含層。本飛地を築造する際の基盤となった土である。土師器を含む。本飛地西側と北側では様相が異なり、西側では旧表土が残る。色調は灰褐色から黄褐色で、細粒砂から粗砂までの粒径からなる。

Ⅵ層 地山。遺物包含層と同じく、本飛地を築造する際の基盤となった土である。遺物は含まれない。シルトから粗砂まで様々な粒径からなる。



第39図 百舌鳥耳原南陵飛地い号 位置図 (1/25,000)

(2) 本飛地西側 (A-A'間)

本飛地西側では、既存外構柵の撤去後、墳丘盛土を詳細に観察することができた。土層を下からみていくと、現地表面より約0.65mの高さ(標高約19m)まで地山(VI層)で、その上に厚さ約0.2mの遺物包含層(V層)が認められる。この遺物包含層上端には、旧表土が残ることから、本飛地築造時の基盤層と考えられる。墳丘盛土(IV層)は、まず遺物包含層上に約0.15mの黄褐色の砂質土(IV-47層)を盛り、その上に3段分の目地を基調として、高さ0.15m、幅0.4m程度のシルト塊が多く積まれている。シルト塊の下部には、旧表土が残るもの(IV-44層など)がある。旧表土を下に向けて土盛をおこなうこの技法は、「天地返し」と呼ばれ、IV-47層上に約0.4mの高さまで確認できる。天地返しの盛土より上は、0.15から0.4m程度の厚さで、ほぼ水平に土盛している(IV-1からIV-8層)。IV-1からIV-8層までの高さは、約1.3mである。

遺物包含層(V層)からは、土師器片が出土したが、小片のため図化できなかった。また、墳丘盛土(IV層)からは、須恵器片が出土した。

(3) 本飛地北側 (B-B'間)

本飛地北側では、新規外構柵の設置予定箇所の一部で、墳丘盛土を観察することができた。土層を下からみていくと、現地表面より約1mの高さ(標高約19m)まで地山(VI層)で、その上に厚さ約0.1から0.2mの遺物包含層(V層)が認められる。

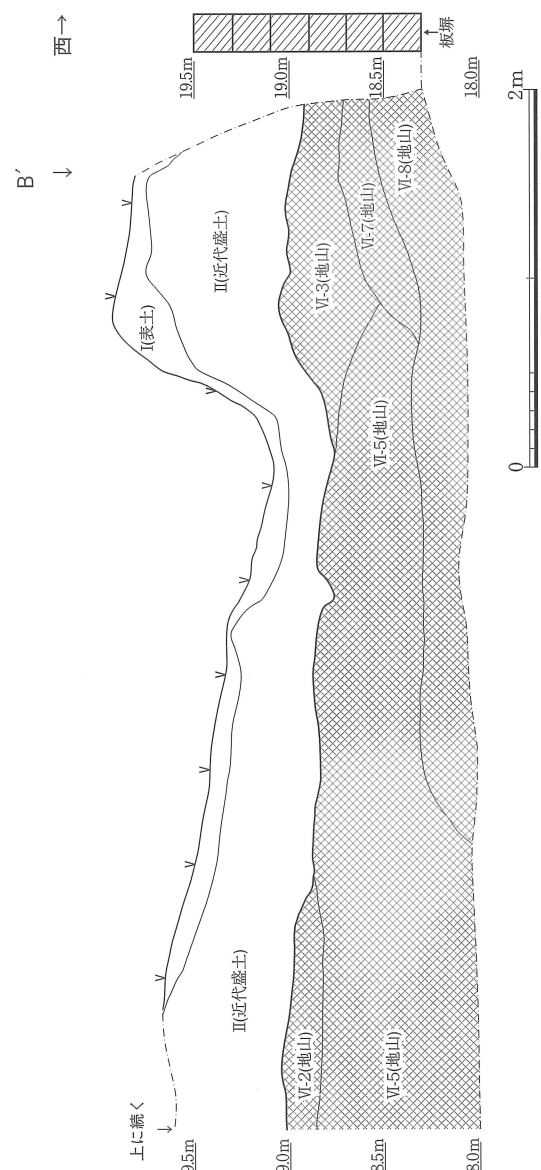
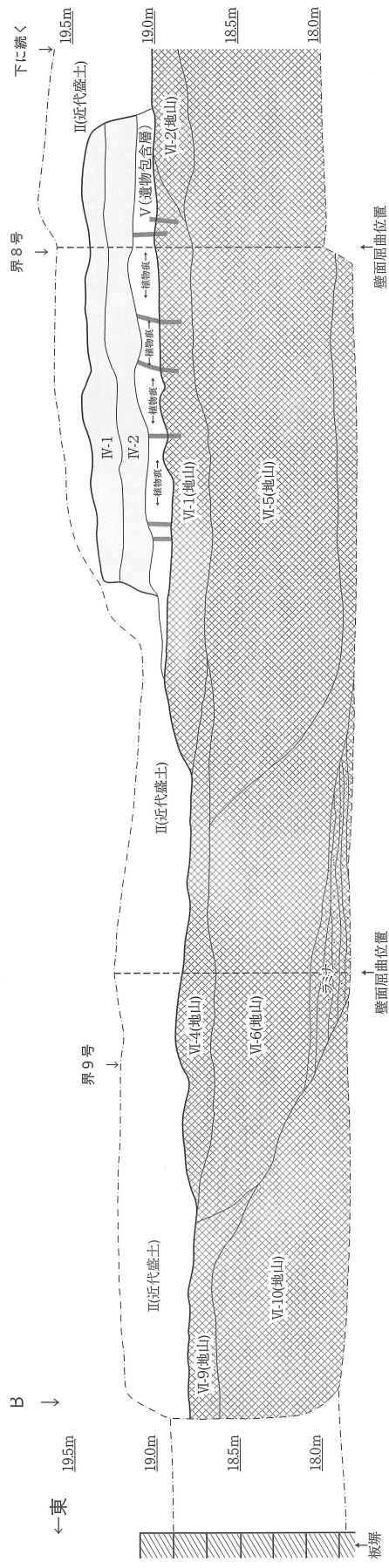
地山は、シルトから粗砂まで様々な粒径よりなる。地山のうち、VI-6層下部には、ラミナが認められることから、かつて流水のあったことがわかる。VI-6層は比較的細かい礫を多く含むが、上層のVI-5層には握り拳大以上の大きな礫も含んでいる。VI-5層は、厚い部分で約0.7mの高さがあり、上部から下部までその内容が均質であることから、強い水の流れによって一挙に堆積したものと考えられる。

地山より上、遺物包含層の上端には、旧表土が残らず、本飛地西側の状況とは異なっている。北側の遺物包含層に旧表土が残っていない理由については、本飛地の基盤を造るにあたり、地面を水平にする必要があり、北側の旧表土を含む遺物包含層の高い部分が削られてしまったためと考えられる。実際、地山から遺物包含層まで伸びる植物の痕跡(茎部分の鉄分)が、墳丘盛土(IV層)との境で途切れている。ゆえに、本飛地西側と同様、遺物包含層が本飛地築造時の基盤層と考えられる。

墳丘盛土(IV層)は、調査地形の問題から、本飛地西側ほど良好に確認できず、IV-1・2層を確認したのみである。西側では、遺物包含層上に砂質土を盛ってから、シルト塊が多く積まれているが、北側の一部では、シルト質の土を1層あたり約0.2mの厚さで水平に盛っている。



第40図 百舌鳥耳原南陵飛地い号 調査地位置図 (1/400)



- I. 表土 細粒砂 黒褐色 (東壁のI層と対応)
- II. 近代盛土 細粒砂 黄褐色 (東壁のII-1層と対応)
- IV-1. 堆丘盛土 シルト~細粒砂 灰褐色 (土師器、須恵器含む)
- IV-2. " シルト~細粒砂 灰褐~褐色 (土師器、須恵器含む)
- V. 遺物包含層 シルト~細粒砂 灰褐~褐色 (土師器含む)
- VI-1. 地山 シルト 灰黄褐色 (径1~3cmの礫含む)
- VI-2. " 細粒砂~粗砂 灰黄褐色 (径1~3cmの礫含む)
- VI-3. " シルト 黄褐色 (径1~3cmの礫含む、東壁のVI-2層と対応)
- VI-4. " 細粒砂~粗砂 灰黄褐色 (径1~3cmの礫含む、IV-2層と近似)
- VI-5. " 粗砂 褐色 (径1~5cmの礫含む、洪水の堆積層か)
- VI-6. " 粗砂 灰~褐色 (径0.1~1cmの礫含む、河川の堆積層か)
- VI-7. " シルト 灰褐色 (東壁のVI-3層と対応)
- VI-8. " 極細粒砂~粗砂 褐色 (東壁のVI-4層と対応)
- VI-9. " シルト 灰黄褐色
- VI-10. " シルト 灰黄~褐色

凡例

- 堆丘盛土
- ▨ 地山
- 植物痕

第42図 百舌鳥耳原南飛地い号 南壁B-B'間断面図 (1/40)

遺物包含層（V層）からは、土師器片が出土したが、小片のため図化できなかった。また、墳丘盛土（IV層）からは、土師器片と須恵器片が出土したが、土師器は小片のため図化できなかった。

（4）本飛地東側（C-C'間）

本飛地東側では、既存外構柵の撤去後、墳丘盛土を観察することができた。土層を下からみていくと、現地表面より約0.6mの高さ（標高約18.7m）まで地山（VI層）で、その上に厚さ約0.8mの墳丘盛土（IV層）が認められた。墳丘盛土（IV層）は、黄褐色から灰褐色の細粒砂からなる砂質土で、6層に分かれる。本飛地東側では、本飛地西側と北側でみられた遺物包含層は確認できなかった。遺物包含層が確認できない理由については、ここで墳丘盛土としたものの一部が、実際は遺物包含層という可能性や、表土から地山までが削られて遺物包含層が残らなかった可能性も考えられる。本飛地東側では、遺物が出土しなかった。

2 出土遺物

（1）遺物の概要

立会調査で出土した遺物は79点で、整理用コンテナ1箱分である。ここでは、墳丘盛土中より出土した遺物と排土中より採集した遺物のうち、図化できた須恵器と埴輪について報告する。須恵器の型式名については、田辺昭三の陶邑編年⁽¹⁾のものを使用した。なお、現在は田辺昭三の陶邑編年による最古型式、TK73型式よりも明らかに古い須恵器の一群が確認されており、ここではそれらを他の研究者と同じく、一群の標識となる窯跡名よりTG232型式と呼んでおく⁽²⁾。

また、図化はできなかったものの、遺物包含層と墳丘盛土からは、土師器小片が出土した。須恵器の出土位置は、1・2・10が本飛地北側（B-B'間）の墳丘盛土中からで、4から9までと11から14までが本飛地西側（A-A'間）の墳丘盛土中からである。3は本飛地北側で採集した。

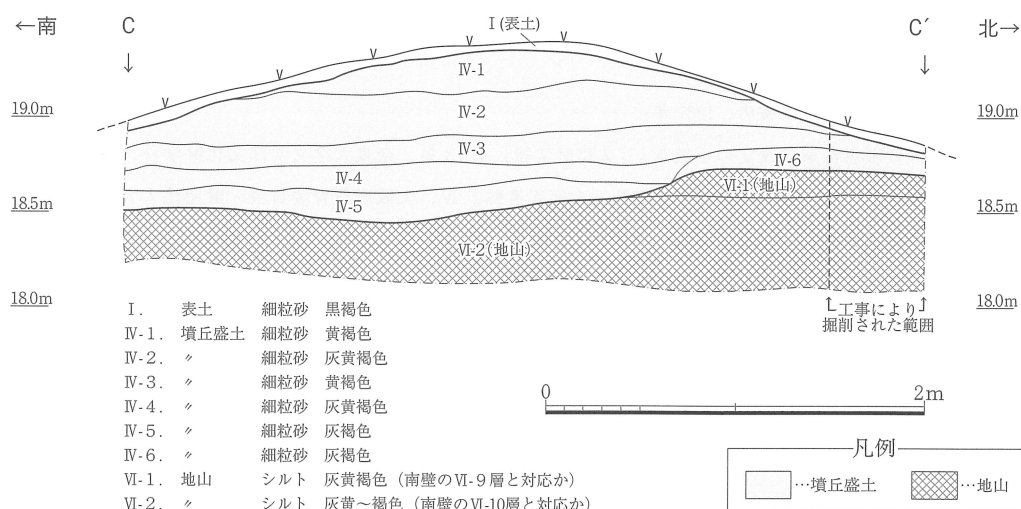
（2）須恵器

1と2は、坏蓋片である。1は体部、2は端が細い口縁部である。調整は1、2ともに内外面へ回転ナデを施す。双方色調は暗灰色で、焼成は良好である。

3は、坏身口縁部片である。調整は内外面へ回転ナデを施す。色調は灰色で、焼成は良好である。小片のため確実ではないが、その型式は口縁部の形状より、TK43型式と考えられる。

4と5は、坏身底部片である。底部の形状は双方平坦である。4、5ともに外面調整には回転ケズリを施し、内面調整には回転ナデ後、不定方向のナデを施す。双方色調は灰色で、焼成は良好である。型式は双方底部形状より、TK208型式と考えられる。

6は、坏蓋上部片である。外面調整には回転ケズリを、内面調整には回転ナデを施す。色調は外面が暗灰



第43図 百舌鳥耳原南陵飛地い号 西壁C-C'間断面図（1/40）

色で、内面と断面が暗赤褐色である。焼成は良好である。型式はその上部形状より、TK 23 もしくは 47 型式と考えられる。

7 は、復元最大径 13.5cm の坏身体部片である。調整は内外面へ回転ナデを施す。色調は灰色で、焼成は良好である。型式はその形状と法量により、TK 23 もしくは 47 型式と考えられる。

8 は、器種不明の頸部片である。その形状や外面の波状文などから、甕の可能性はある。調整は自然釉や施文のため不明である。色調は外面が暗灰色で、内面が灰色である。焼成は良好である。

9 は、復元最大径 14 cm の器台脚部片である。器台としては、小型のものに属する。調整は内外面へ回転ナデを施す。色調は内外面が灰色で、断面が暗赤褐色である。焼成は良好である。

10 は、器種不明の体部片である。外面に粘土塊を貼り付けている。色調は内外面が灰色で、断面が暗赤褐色である。調整は不分明で、焼成は良好である。

11 は、甕口縁部片である。口縁端部は上下につまみ上げるような形状で、口縁部下方に 1 条の低い突帯をもつ。調整は内外面へ回転ナデを施す。色調は内外面が灰色で、外面の一部が黒褐色である。焼成は良好である。型式は口縁部形状より、TK 208 型式と考えられる。

12 は、甕頸部片である。調整は内外面へ回転ナデを施すが、とくに外面上部には回転ナデの痕跡が強く残る。色調は内外面が暗灰色で、断面が灰色である。焼成は良好である。

13 は、甕体部片である。外面にはタタキ痕、内面には当具痕が残る。色調は灰色で、焼成は良好である。

(3) 埴輪

14 は、円筒埴輪体部片である。突帯断面は台形である。内外面調整にはナデを施したと考えられるが、内面は磨滅のため不分明である。色調は褐色で、焼成は良好である。

(4) 遺物からみた本飛地

今回の調査では、採集品の 3 (坏身) を除き、墳丘盛土より TK 208 型式から TK 23 もしくは 47 型式までの須恵器が出土したことから、すくなくとも本飛地は、TK 23 もしくは 47 型式期以降の築造と考えられる。本飛地と同様に、本陵の近傍にある寺山南山古墳は、本陵の陪冢と位置づけられている⁽³⁾。この寺山南山古墳からは、TG 232 型式の須恵器が出土しており、須恵器からみた場合、本飛地よりも数型式以上に造られたことは確実である。

まとめ

今回の立会調査は、境界際の外構柵整備工事にともなうものであったため、遺構は検出されなかった。ただし、境界際では外構柵の撤去後、墳丘盛土とその構築状況を詳細に確認することができた。また、墳丘盛土出土須恵器によって、本飛地の築造時期が TK 23 型式期以降と判明したことは重要である。(横田真吾)

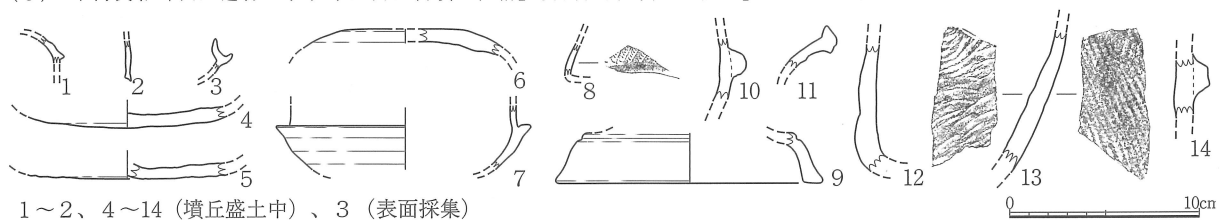
註

(1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。

(2) 植野浩三「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第13集、奈良大学文学部文化財学科、1995年。

岡戸哲紀「TG 232号窯の初期須恵器」『陶邑・大庭寺遺跡』IV、大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会、1995年。

(3) 十河良和「出土遺物が示す寺山南山古墳の性格」『百舌鳥古墳群の調査』6、2012年。



1~2、4~14 (墳丘盛土中)、3 (表面採集)

第44図 百舌鳥耳原南陵飛地い号 出土品実測図 須恵器・埴輪 (1/4)



1 調査地全景（北東から）



2 南壁（北東から）



3 南壁（北西から）



4 西壁（東から）



5 遺物集合



1 東壁（西から）



2 東壁近景（西から）